

日本広報学会「企業スポーツ広報」研究会
2000年度報告書

2001年3月

主査：阪南大学教授 貴多野乃武次 編

はじめに

本報告書は、日本広報学会「企業スポーツ広報」研究会の2000年度の活動内容をまとめたものである。

研究会は1999年度と本年度の2ヵ年にわたり、99年度の活動については、2000年3月発行の中間報告書にまとめた。

中間報告書を出したあとも、企業スポーツの危機を伝えるマスコミ報道が後を絶たない。人は、日頃関心のあるテーマを持っていないと、新聞も何気なく読み過ごすものである。しかし、関心の強いテーマを持っていると、日頃読み過ごす新聞の片隅にもテーマと関連する話題を見つけ出す。しかし、企業スポーツについては、新聞の片隅どころか、スポーツ面だけでなく、社会面、経済面でも大きく取り上げられるので、関心のない人の目にも入る。

2000年7月5日、「東洋の魔女」と呼ばれたバレーボール日紡貝塚の伝統を引き継ぐVリーグ女子のユニチカの廃部が決まった。ユニチカの前身、日紡貝塚が、故大松博文監督指導のもと「変化球サーブ」や「回転レシーブ」をあみ出し、64年東京五輪では全日本の中心となって、金メダルを獲得した。私事で恐縮だが、東京五輪でソ連と優勝を争った女子バレーの試合の模様を、私は青函連絡船のなかで流れるラジオの放送で聞いていたことを思い出す。日紡貝塚は、私が育った岸和田市の隣の貝塚市にあった。その後、日紡はユニチカと名前を変えた。ユニチカ貝塚工場は97年に閉鎖された。そして、ユニチカは97年度、赤字に転落した。

バレー部の廃部について、ユニチカの人事部長は、「経営立て直しの一環として決断した」と戦略的評価を強調し、広報部は「過去の価値観や伝統にこだわらないという社内外へのメッセージが含まれている」とクールにコメントした。しかし、バレー部長には遺憾の気持ちが残っていて、「長い間、社を支えてきた部活動であり、応援してくれた方々やOG選手たちにも誠に申し訳ない」と言うが、バレー部監督は諦めたように、「全体移籍がかなうように一生懸命頑張るしかない」と語る。社業にほとんど携わらなかった選手（主将）は、「会社がどうであれ一生懸命バレーをやることがわたしたちの仕事だと思う」と言うが、会社がどうでもなくなったいま、「企業スポーツに支えられてきた日本バレーの時代が終わろうとしている。…結局、日本にはその（メセナ）精神は根付かなかった」と、日本バレーボール協会の松平康孝最高顧問は、企業スポーツ終焉の言葉をにじませる。

ユニチカ・バレー部は、選手や監督の願いが通じたのか、幸いにもスタッフ全員が東レに移籍することが、8月9日決まった。東レの専務は受け入れ理由として、「ユニチカの歴史は、一企業のものでなく社会的財産である、また東レの男子バレー部と合わせ、東レの

シンボルスポーツの両輪に育成できる、そして社会還元活動の一環である」という3つをあげる。捨てる神あれば拾う神ありだが、バレー関係者は時代の変化を痛感している。岡野 V リーグ実行委員長は、「バレーは時代ごとに業績の良い業種、企業に支えられてきた。だがこれからは、企業に頼ってばかりはいられない」と言う。そして、ユニチカの選手は「バレーができることが当たり前ではないことがわかった」と振り返って話した。(以上、日経新聞7月5日、朝日新聞7月6日、朝日新聞8月10日)

日経新聞では、2000年9月に3週にわたる大型連載企画「スポーツはだれのものか」の特集を組んだ。

トップバッターの横浜 FC ゼネラルマネジャーの奥寺康彦氏は、ドイツでのサッカー選手の経験から、「(ドイツでは) サッカーはやって楽しむだけでなく、代表チームを応援することも生きがいのひとつになっている。…(日本では) これまで企業スポーツが中心で、“自分たちの代表”という意識が持てなかった。…自社 PR を目的とする企業は効果がなくなれば支援をやめてしまう。それではスポーツ文化は育たないと思うんです。一朝一夕にはいきませんが、主役を担うのはやはり地域住民になっていくべきでしょう」と語る。

二番目に登場した徳永哲男氏は、運動部の休・廃部を決める企業が相次ぐ中、数多くの五輪メダリストを輩出し、シドニー五輪にも陸上、柔道の代表選手5人を送り込んだ旭化成工業の副社長である。

徳永氏は、「わが社はそういうこと(企業スポーツをリストラの対象にすること)は絶対にありません」と断言する。同社には、陸上、男子バレーボール、柔道の3つを運動部として認めたのは、「野武士的な社風もあるが、運動部には会社が相当の資金をつぎこむわけですから、日本でトップクラスでないと社員の共感が得られない」からで、「選手たちがなにくそ、と苦しみながら栄光を勝ち得る。それが一般社員のやる気をかきたててくれることを期待しているのです」と、熱っぽく企業スポーツの社内効果を訴える。

旭化成は、スポーツ活動だけする外国人選手や契約社員を絶対とらない。陸上の選手は、早朝練習をしたあと、それぞれの職場で仕事をして、夕方から合同練習をする。そのあと、職場に帰って残業する選手もいるという。選手のモットーは「良き社会人たれ、良き企業人たれ、そして五輪の勝者たれ」で、この順番に注意しなければならない。同社では、選手を引退したあと会社をやめるケースはない。

発祥の地、延岡では、毎年行われる陸上の記録大会が地域と一体化したシンボルイベントになっていて、走る選手のすぐ近くで観客が応援できる手作りイベントが、いまや地域の名物イベントになっている。「社員に理解されるだけでなく、地域に理解されない企業スポーツは意味がない」と言う。

旭化成運動部のケースは、いまや稀有な例と言ってもいいが、企業スポーツを考えるう

えで貴重である。

最後に登場するノンフィクション作家、後藤正治氏は、「日本スポーツ界はやはり特異に映る。スポーツに社会性が欠けているのはさびしい」と指摘するが、「企業スポーツも学校スポーツもすべてを否定するのではなく、功罪を吟味してメリットは生かせばいい」という立場をとる。しかし、企業スポーツ、学校スポーツの功罪が明らかにされないので、足して2で割ったような結論であり面白くない。

そうこうしているうちに、シドニー・オリンピックが始まり、日本選手の活躍に、一時企業スポーツの問題はマスコミで取り上げられなくなったが、華やかなオリンピックの陰で、企業スポーツのリストラは着実に進行していた。

オリンピック熱も冷め、ミレニアムの活気も去った2001年1月15日の日経新聞には、2000年に休・廃部を実施、決定した企業の主なチームが以下のように挙げられた。

〈バレーボール〉女子：ユニチカ、日立

〈バスケットボール〉男子：日立大阪、愛知機械

女子：三洋電機、第一勧銀、富士銀行

〈野球〉プリンスホテル、王子製紙苫小牧

〈アイスホッケー〉雪印、日光アイスバックス

〈ハンドボール〉男子：三陽商会、デンソー、

女子：大崎電気

〈ラグビー〉伊勢丹

〈陸上〉雪印、城山観光、横浜銀行

〈サッカー〉女子：鈴木清水、松下電器、プリマハム、OKI

〈ソフトボール〉女子：日通工

〈バドミントン〉女子：三協アルミ

〈ホッケー〉女子：ゴールドウィン

日経新聞のこの記事のあと、2月5日、女子マラソンで有森裕子、高橋尚子も在籍した女子長距離界の名門、リクルートが陸上部の休部を発表した。

企業スポーツ受難の時代はまだ続く。

このように見てくると、本研究会は、皮肉にも時流に乗った研究会といえ、研究材料には事欠かないのだが、苦境に陥っている企業スポーツの関係者に報告を求めるのは難しく、そうした「生の声」を企業からも選手からも聞くことは、おのずから少なくなった。一方、企業スポーツをめぐる新たな動きも顕著になってきた。たとえば、神戸製鋼が支援する地域スポーツ振興活動である。そうした活動の現場には、研究会メンバーも出かけた。

本年度の研究会は、当初計画よりも2回多く計7回を、以下のような要領で開催した。いずれも大阪・梅田の関西文化サロンで午後7～9時の2時間開催し、興味ある報告と活発な議論があった。

- 第1回 『『スポーツアルマナック』に見るスポーツ観の比較』
報告者：芝田正夫（関西学院大学、研究会メンバー）
- 第2回 「JTの広報型スポーツ活動」
報告者：佐向寛昭（日本たばこ産業、研究会メンバー）
「SCIX（スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構）の設立と活動」
ゲストスピーカー：氏家啓喜（神戸製鋼所 法務部担当部長）
- 第3回 「オリンピックと企業スポーツ」
ゲストスピーカー：高井眞行（大阪市スポーツ振興協会専務理事）
- 第4回 「ダイハツにおけるスポーツと広報」
ゲストスピーカー：宮本寿一（ダイハツ工業 陸上部事務局長）
宮脇義廣（ダイハツ工業 人事課長）
「シドニー五輪報告」
報告者：小野豊和（松下電器産業 研究会メンバー）
- 第5回 「日本ビクターのワールドカップ・スポンサーシップ」
ゲストスピーカー：鎌倉喜彦（日本ビクター ワールドカップ推進室課長）
- 第6回 「韓国のプロサッカー事情」
報告者：黒田 勇（関西大学 研究会メンバー）
- 第7回 座談会「企業スポーツと広報」
コーディネーター：津金澤聡廣（桃山学院大学 研究会メンバー）
出席者：研究会メンバー

研究会報告のうち、研究テーマに直接関わるものについては、川戸氏が論文のなかで触れられているので参照していただきたい。その他の報告のうち、芝田、佐向、氏家、高井、小野、鎌倉の5氏には、あらためて本報告書に寄稿していただいた。また、上野と貴多野は研究会では報告しなかったが、あとで論稿としてまとめた。

川戸氏には2年間の研究会活動を総括する論文を書いていただいたが、それをもとに、最終回では研究会メンバーによる総括の座談会を開き、名取氏にまとめていただいた。本報告書が受難の時代にある企業スポーツについて考える一助になれば幸いである。

貴多野乃武次

目次

はじめに

企業スポーツの現状と広報の課題

川戸和英（大阪電気通信大学）…………… 1

J Tと広報型スポーツについて

佐向寛昭（日本たばこ産業株式会社）…………… 1 8

特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構

（略称；S C I X）の事業活動と地域社会との関わり

氏家啓喜（株式会社神戸製鋼所）…………… 2 1

続・五輪と広報—メディア・スペクタクルによる効果—

小野豊和（松下電器産業株式会社）…………… 2 8

もうひとつのオリンピック—パラリンピックと広報活動

上野弘子（広報メディア研究所）…………… 3 6

スポーツ物語広報—金メダリスト高橋尚子の場合

貴多野乃武次（阪南大学）…………… 4 6

スポーツと行政

高井真行（財団法人大阪市スポーツ振興協会）…………… 7 6

『スポーツ・アルマナック』に見る日米のスポーツ観の比較

芝田正夫（関西学院大学）…………… 8 1

座談会「企業スポーツと広報」

コーディネーター：津金澤聡廣（桃山学院大学）

出席者：研究会メンバー

記録者：名取千里（株式会社ティーオーエー）…………… 8 6

「企業スポーツ広報」研究会メンバー／＜編集後記＞……………100